

ヘンリー・ジエイムズの『デイズイ・ミラー』

——アメリカ外交の参考書として讀む

岡田俊之輔

ヘンリー・ジエイムズの中篇小説『デイズイ・ミラー』には一八七八年の發表當初から、*a Study*、といふ副題が附いてゐた。一九〇九年、大幅な改訂の上、所謂ニュー・ヨーク版全集に收められる際にそれは落されたのだが、當該の卷の「序文」によれば (*NYE* 18vi)、抑も何故そのやうな副題を附けたかは作者本人も確と思ひ出せず、恐らく Daisy Miller なる女主人公の姓名だけでは作品名として「或る種の平板」を免れまいと懸念したためではなかつたかといふ。「粉屋雛菊」、確かに平板な命名である。のみならず、「彼女の物語全體」もまた實に平板であつたと作者は評する。金満實業家を父に持つ自由奔放な美しいアメリカ娘が母と弟と共にヨーロッパを旅して、本國に於けるも同然に無邪氣かつ大膽に自分の流儀を押通し、舊習に縛られてゐるヨーロッパ社會で人々の顰蹙を買ひ、最後は熱病に罹つて死ぬ——成程、或る意味では平板な話かも知れない。さういふ譯で多分、本格小説ならぬ「一つの研究」

と稱する事で、讀者からの過大な期待を躱さうとしたのではあるまいかと幾分謙遜氣味にジエイムズは往事を振返る。けれどもこの作物は「批評的」な觀點から著されたものでは全くなく、頗る「詩的な言葉で」表現されてゐるから、批評的・批判的「研究」などとはとても呼べぬ、固より氣附いてゐて然るべきであった「その單純な眞實に鑑み」、改稿を機に副題を削つたとの事である。(1)

三十年以上の長きに亘り「研究」と銘打たれてゐたにもかかはらず、右の聊か韜晦めいた説明を聞いても結局の所、その研究對象が何であつたのかは必ずしも判然としない。極く常識的には表題主人公の研究、すなはち天眞爛漫なアニー・P・ミラー (*DM* 10)、通稱デイズイ・ミラーがヨーロッパに暮す頑迷固陋な連中に疎外される様を考察したものと言へようし、また見方を變へれば、この物語は、ジュネーヴ在住にして年頃二十七歳ばかりの若きアメリカ人フレデリック・ウインターボーン (4, 18)、ニュー・ヨー

ク版では‘Frederick Forsyth Winterbourne’とミドル・ネイムも與へられてゐる青年 (NYE 18:31)、正に彼の視點をとほしてほぼ全篇が描かれるといふ結構になつてゐるので、例へば W・E・グラントの主張するやうに、「ディズイを研究するワインターボーンについての研究」と看做す事も勿論可能であらう (17)。この他にも色々と解説のしやうはあり得るが、要するに、ジェイムズによる自作解説が作品解釋の幅を限定するどころか、曖昧な言舉げゆゑに卻つて多様な解釋を誘發する形になつてしまつてゐるやうにも思はれる。そこでと言つては何だが、私も一つ唆^{そそのか}しに乗り、更に別の読み方を提示してみたい。すなはち彼の書いたものを——唐突に響くに違ひないが——アメリカ外交の研究書、とまではゆかずとも、それを考へるための参考書として讀まうとするものである。全く先例が無い譯ではない。嘗て「ジェイムズの人氣の波が第二次世界大戦や國聯創設と同時期に大いに高まつたのは單なる偶然ではな」く⁽²⁾、彌増す「國際理解への慾求」が「ジェイムズによる國際社會關係の精妙な探求を讀むためにお誂へ向きの氣運を釀成した」とメアリアス・ビューリーは指摘してをり (220-21)、これなどは似たやうな讀まれ方をした事例と見てよからう。私見では、その「氣運」も今やお寒い限りだが、たとひ時代は變れど、今なほ「國際理解」や「國際社會關係」は吾々にとつても決して無縁の話ではあ

り得ない筈だ。さうした諸々を踏べつつ、以下はヘンリー・ジェイムズ獨得の「國際テーマ」に關する謂はば應用研究とでも受取つて貰ひたい。

令和二年現在品切になつてゐるが、岩波文庫版『ねぢの回轉 デイジー・ミラー』のジャケットには、「(ア)メリカ的なもの」と「ヨーロッパ的なもの」との對立を扱ひ、一躍ジェイムズの文名を高めた『デイジー・ミラー』との惹句が載つてゐた⁽³⁾。但し嚴密に言ふと、デイズイに反撥するのはヨーロッパ人といふよりも寧ろヨーロッパ在住のアメリカ人である。作者のジェイムズ自身、ニュー・ヨーク生れではあるがヨーロッパに長く在住し、死去の前年、イギリスに歸化した作家であつて、デイズイの自由奔放とヨーロッパの因襲との對立は、アメリカに生を享けた自らの内なる葛藤の表現に他ならず、それがジェイムズ終生の切實なテーマであつた。抑も彼が永住の地としてヨーロッパを選んだのは、本格小説の執筆にとつて不可缺な「歴史と慣習の蓄積」や「風習と様式の交錯」がアメリカには決定的に缺けてゐる事を痛感したからである (James, H 55)。『ディズイ・ミラー』發表の翌年に上梓された、ナサニエル・ホーソーンを論じた評傳の第二章から有名な“缺品一覽”を引かう。

ヨーロッパ的な意味での國家は無い、實に辛うじて

特定の國名があるばかり。君主はない、宮廷は無い、個人的な忠義心も向けやうがない、貴族制度は無い、國教會は無い、僧侶階級は無い、軍隊は無い、外交部局は無い、地方の素封家はゐない、宮殿は無い、城は無い、莊園も無い、古いカントリー・ハウスも無い、牧師館も無い、藁葺の小屋も無ければ薦の絡まる廢墟も無い。大聖堂は無い、大修道院も無い、小さなノルマン建築の教會も無い。立派な大學は無くパブリック・スクールも無い——オックスフォード大學は無い、イートン校も無い、ハロウ校も無い。文學は無い、小説は無い、美術館は無い、繪畫は無い、政界は無い、スポーツ賭博に興ずる階層は無い——エプソム競馬場は無くアスコット競馬場も無い！（55）

かうした無い無い盡しの「冷たさ、乏しさ、空しさ」（55）、それに比べれば、たとひうんざりするやうなものであつても確と存在するものに圍まれたロンドンでの生活のはうが、遙かに手應へを感じられるのであつた。ジェイムズは備忘錄に記してゐる、「霧、煙、汚物、暗闇、濕氣、遠距離、醜惡、この地の無茶苦茶な廣さ、社會に溢れる恐ろしい程の人の多さ」等々、洵に氣が滅入るものばかりだが、それでも「藝術家」つまり「觀察の情熱を持ち、人生の研究を生業とする者」にとつては、ロンドンこそ正に

「この世の最も完璧な摘要」なのだ（NHJ 27-28）。この最後の語句を、備忘錄の編者の一人でもあるF・O・マッセンは自著の中で、「この世で最も見返りを與へてくれる場所」と言ひ換へてゐるが（3）、さういふ「見返り」を「人生の研究」に於て凡そ期待できぬ母國アメリカにジェイムズは見切りを附けたかに見える。けれども見誤つてはならない。エドマンド・ウイルソンの言ふやうに、「彼が生國を離れて最終的に英國民となつた事を根據に世人は勝手な思ひ込みをしてゐるが、しかしジェイムズの作品に於ては合衆國の理想こそが勝ちを制するのである。後期になると、アメリカ精神に對する熱烈この上なしの讚辭が現れる」（131）。そしてそれは何も後期に限つた話ではあるまい。早くも二十代の終り頃、一八七二年二月四日附チャーチルズ・エリオット・ノートン宛の書翰にはかう認められてゐる、「アメリカ人である事は複雑な運命だ。それに伴ふ責任の一つは、ヨーロッパの迷信的な價值判斷と鬪ふ事である」（CL 438）。

アメリカの文化的不毛を意識しつつ、さりとてヨーロッパの價值觀に盲從する事も出來ずいたジェイムズだつたのだが、そんな「複雑な運命」に見舞はれた彼が三十代半ばに物した『ディイズィ・ミラー』に於ては、「ヨーロッパの迷信的な價值判斷」をつゆ疑はぬ在歐アメリカ人に對して批判的であり、主人公は概ね肯定的に描かれてゐると言

つてよい。訪れたローマで、知り合つたばかりの「三流イタリア人」伊達男ジョヴァネッリと派手に遊び廻るデイズィに(DM 34)、現地在住のアメリカ人たちは眉を顰める。視點的人物ウインター・ボーンの友人、ウォーカー夫人が彼女を窘めて言ふ、「それは楽しいかも知れませんね、お嬢さん、だけどさういふのはこここの習慣ではございませんのよ」(45)。無論、彼女を氣遣つての忠告ではない。彼女のやうな同胞の存在がローマのヨーロッパ人に對して只々恥づかしいのである。それゆゑ、「デイズィ・ミラー嬢は若きアメリカ女性ではあるが、彼女の振舞はその典型ではなく——同胞からも異常と看做されてゐるのだといふ重要な眞實を、觀察力の鋭いヨーロッパ人たちに表明したいと仄めか」すやうな態度を取る(59)。要するにローマのアメリカ人は、絶えずヨーロッパ人を氣にせずしては生きてゆけぬ文化的劣等感の塊なのである。一方デイズィは、事も無げにかう言ひ放つ、「へえ、なら、習慣にしたらいちややない！」お散步しなかつたら、あたし、苦しくて死んぢやふわ」(45)。そしてウインター・ボーンからの善意の忠告にもかう返す、「あたし、有難い事に、この國の若い女ではないし。この國の若い女の人たちつて、それはそれは詰らない時間を過してゐるみたいね、聞く限りだと。あたしには解らないわ、どうしてあたしの習慣を變へなきやいけないのかしら、そんな人たちのために」(52)。劣等感と

は丸で無縁のかうした無邪氣な發言には、無教養や軽蔑の不在も多分に與つてはゐるが、とにかく嫌味が無い。少なくとも、嫌味を感じさせぬやうに作者は描かうとしてゐる。無論、その種の無教養や不躾をも擁護するかの如き描き方に異を唱へる者はゐて、例へば教養教育の大事を説き續けたイギリスの批評家F・R・リーヴィスは、「不十分な根據に基づきアメリカ的立場を取るジェイムズ」を批判してかう書いた。

デイズィ・ミラーの自由奔放ぶりはヨーロッパの社會慣習を物ともせぬが、この種の振舞をすれば、如何なる文明社會に於ても彼女は鼻摘みとならう。「中略」全く無教養であるし、知的な男なら長時間この女に辛抱する事なぞ出來ぬであらう、どうせ碌な言葉の遣取りもあり得まいから。彼女の魅力を引立てるものと言つたら、容姿、金錢、自信、服裝、それ以外にありはしない。(166)

隨分な言ひやうだが、それでもジエイムズに在つては、縱んば後世さういふ論難を浴びせ掛けられる事にならうと、「ヨーロッパの迷信的な價值判断」よりも「合衆國の理想」や「アメリカ精神」の可能性のはうに賭けたい氣持が最終的に「勝ちを制」したといふ事に他なるまい。それゆゑ、

「始めは幾つかの點でデイズイを批判してゐたが、最後は單に讃美するだけで終つた」といふキャロル・オーマンの評も決して外れてはゐないし（211）、リーヴィスの「不十分な根據に基づき……」云々も十分な根據に基づいた物言ひではあるが、とにかく「自然と自由の子」デイズイを描くジェイムズの筆致は勢ひ好意的にならざるを得なかつた（NYE 18:v）。同じ事はデイズイの弟である九歳の腕白小僧ランドルフ・C・ミラー（DM 11, 5, 9）、この男の子の描寫にも當て嵌る。以下に列舉する臺詞は、決して手放しで肯定されてゐる譯ではないが、さりとて否定の對象として插入されてゐるやうには到底見えぬであらう。自分の歯が抜けたのも、「どうしやうもないさ。この古いヨーロッパのせゐなんだ。こここの氣候のせゐで抜けちやふんだよ。アメリカぢや抜けなかつたもん」（5）。それでも甘い物を欲しがるが、「ここぢや全然キャンディが手に入らない——アメリカ製のキャンディがね。アメリカのキャンディは最高のキャンディなのに」（6）。異國で出會つたウインターボーンには、「アメリカ人なの?」「アメリカの男の人つて最高だよね」（6）。家族を紹介する際には、「僕のお父さんの名前はエズラ・B・ミラーつていふんだ。お父さんはヨーロッパにはゐないよ。ヨーロッパなんかよりももつと良い所にあるんだから」。さう聞いてウインターボーンは一瞬、既に亡くなつて天國に?と思ふものの、ランド

ルフは直ぐさま言葉を繼いで、「お父さんは「ニュー・ヨーク州の工業都市」スケネクタディでビッグ・ビジネスをやつてるんだ。金持さ、勿論」（10）。おまけにウォーカー夫人の家では、「うちのはうがここよりもでつかいや。壁なんか全部、金だし」（36）。いづれ年端も行かぬ少年の幼稚な臺詞ではあるが、寧ろ微笑ましいとさへ言へよう。

だが、微笑ましいと言ふだけでは済まさぬ問題がある。それを論ずる足掛りとして、先づはT・S・エリオットのジェイムズ論を取上げたい。ジェイムズは「文藝批評家」としてはさほどの成功を收めなかつたけれども、その代り、自らの小説に於ける人物造形には批評の才能が鋭く働いてゐるとエリオットは見て取り、それを次のやうに敷衍する。

彼は觀念ではなく、生きて在るものを持へて食らふ批評家であつた。その批評は非常に高度な意味で創作的だ。登場人物たちの中でも最も見事な者たちは、それぞれ創作の紛れもない成功例であり、デイズイ・ミラーの弟もその一人。くつきりした平面畫に描かれた人物たちは一人々々が、實質を十分に具へた獨得の現實から搾り出されており、與へられるものは總て、その個々の人間にびたりと噛み合ふ。けれどもそれは、優れた手際で撰ばれ、全般的な枠組内の然るべき所に置かれるからなのだ。全般的な枠組とは一人の人物で

もなければ、話の筋に出て来る、或は單に大勢から成る、一群の人物たちでもない。焦點となるのは一つの状況であり、關係であり、氛圍であつて、それに對して登場人物たちは色々と貢ぐのだが、作家の欲するものだけを貢ぐ事が許されてゐるに過ぎない。眞の主人公は、ジェイムズの物語のいづれに於ても、一つの社會的實體なのであつて、男たちや女たちはその構成要素である。(649)

これを要するに、ジェイムズがランドルフ少年の造形に成功してゐるのは、一人の子供としての個性を存分に發揮させたからではなく、「一つの社會的實體」を小説の「一般的な枠組」に据ゑ、飽く迄もその枠組の内部で、一登場人物として過不足なく語らせてゐるからだといふ事になるが、『デイズィ・ミラー』の場合、その「社會的實體」とは、ヨーロッパの流儀なぞ全く意に介さぬ新興成金アメリカの擡頭を意味しよう。ランドルフも姉のデイズィも無邪氣そのものだから、さういふ無害の存在なら、ヨーロッパ人も依然、餘裕を以て嗤つてゐる事が出來た。ここで小説の外に材を取り、一例を擧げると、アメリカの知識人モンキュー・コンウェイがヴィクトリア朝文壇の大御所トマス・カーライルに、アメリカ流の自由と民主主義を高らかに謳ひ上げる國民的詩人ウォルト・ホイットマンの作品の素晴

しさを認めさせようとしたところ、カーライルは歯牙にも懸けずにかう言つたといふ——此奴は結局、「俺はでつかい人間だ、だつてこんないでつかい國に住んでるんだから」と言つてゐるだけぢやないのかね？(Conway 100) 因みにアイルランドの詩人ウイリアム・アリンガムの日記にも、ホイットマンに關するカーライルの放言が書留められてゐる、「まるで town-bull 「町共有の種牛。轉じて、亂交男」がペンを握る事を覺えたかのやうだ」(212)。恐らく、詩集『草の葉』にも見られる性的な表現を目しての科白であらう。

かういふホイットマン評の當否はともかく、アメリカ當代切つての大詩人とて、イギリスの文豪の目には、謂はばデイズィの弟なみの幼稚な人間としか、いやいや殆ど家畜なみにしか映らなかつた譯である。コンウェイによれば、カーライルは更にかうも語つたといふ、「アメリカは、事によると、でかいだけでなく偉大な國になるかも知れない。だが、この世の経験や老いたるものから學ばなくてはならぬだらう。世の權威とはこれまで常に年を経たものであつた〔中略〕。『若きアメリカ』はそこを考へなきやいかん」(100)。これは「若きアメリカ」からすれば「ヨーロッパの迷信的な價值判断」以外の何ものでもないが、カーライルにしてみれば常識的な、餘りにも常識的な自明の理だつたのであり、單に會話の上ののみならず、著書の中でも「若

きアメリカ」に對しては極めて否定的な裁斷が爲されてゐる。「近代に於ける殆ど完全な民主主義の實例」たる「模範的共和國」アメリカ合衆國も、彼にとつては「the waste lands」すなはち（エリオットではないが）荒地同然の、只々膨大な「綿、ドル、產業、資源」を誇るばかりの精神的不毛の地、未だ崇敬に價するやうな「偉大な人間の魂」も「偉大な思想」も何ら生み出してはゐない、「二十年毎に人口を倍増」させて「千八百萬人のこの上なく退屈な連中」を産み落しただけの馬鹿でかい國、自慢の「憲法」とて「古」^{いじく}のピューリタン的なイギリスの工房から、出來合ひで」持出したに過ぎぬ只の摸造國家でしかなかつた（25-28）。カーライルが『當世時事小論集』にかう記したのは一八五〇年だが、その後アメリカは南北戦争を經て、着々と國力を増してゆき、ロバート・ベン・ウォーレンの言葉を藉りれば、「だだつびろくて、結びつきのゆるやかな嘗ての國家は消滅し、『巨大組織』の國民國家が姿を現し」（二八）、やがて堂々と舊世界に立向ふに至る。内戰勃発百周年に刊行されたウォーレンの本からもう少し引いておかう。

「巨大ビジネス」を手掛ける、「南北戦争の生み出した實業家といふ新種族」（三〇）——ディズィ・ミラーの父親も正しくその一人であり、彼等に象徴されるやうな「經濟力への新たなる確信」が國民全體の自信に繋がつた事は確かである。だがそれだけではない。ピューリタンの精神も、成程イギリスから移植された當初は「出來合ひ」であつたにせよ、本家「イギリスの工房」が廢れた後もなほ、殖民地時代から二百年以上に亘つて獨自の成長を續けたのであって、そのやうな「舊來」のピューリタニズムを重要な下地にして、アメリカは「強烈な使命感」を新たにしたのである。勿論これは文學にも關はる話であり、例へば、アメリカ・ルネサンス期のホーソーンに端を發する文學上の傳統たる「ニュー・イングランドのピューリタン的人生觀」

統一國家、奴隸制の廢止、爆發的な西方への發展、巨大ビジネスと巨大テクノロジー、戦争のスタイル、哲學、そして政治——以上の全てに、吾々は南北戦争

から「アメリカ文學はつひぞ逃れ出た事が無いやうに思はれる」とスティーヴン・スペンダーは指摘し、現代米文學の巨匠たち、すなはちヘンリー・ジェイムズも、ウィリアム・フォークナーも、アーネスト・ヘミングウェイすらも、そしてT・S・エリオットは言ふ迄もなく、皆その同じ傳統を背景にして新たな文學技法に挑戦してゐると見た。ピューリタニズムの信仰者とは呼べぬジェイムズも、スペンダーに言はせれば、「ピューリタン道徳を信ぜぬピューリタン」といふ事になるのであって(40-42)、正にさうした清教徒的氣質の持主にして始めて、「ヨーロッパの迷信的な價值判斷と鬪ふ」べしとの「責任」感も生れたに相違ないのである。ジェイムズの長篇小説『使者たち』の主人公ルーカス・ランバート・ストレザー(NYE 21:14)⁽⁴⁾、この男の言動もまた例外ではない。委細は省くが、とにかく最終的に總てを捨て去るのも、偏に「正しくあるため」なのだ(22:326)。袖にされた女、マライア・ゴストリーが見抜いたとほり、「正しい」状態に現にある事よりも、「御自分を正しくあらしめるものを追ひ求め、見極める、貴方の恐ろしく鋭い眼」(22:327)、それが總てを決するのである。といふ事はつまり何であれ、得心がゆかぬ限りは「正しくない」のであり、それゆゑ、言ふならばザイン(今ある現實)に甘んぜず、ゾルレン(あるべき理想)に絶えず驅り立てられる事となる。物語の少なくとも結末に於けるスト

レザーは、さういふ「ニュー・イングランドのピューリタン的人生觀」を正統に體現する者と言つても過言ではない。そしてデイズィ・ミラー的な天真爛漫と、ランバート・ストレザー的な正義感に衝き動かされた清教徒的理學主義とが互ひに手を取り合ふ時、アメリカといふ國の眞の手強さ、恐ろしさが發揮される。「何故こちらの習慣を變へなければならぬのか。そんな必要は無い」とか、「そちらこそ吾々の流儀を習慣にすべきである。舊弊は廢止せよ」とかいふ自信は、デイズィの無邪氣なそれと同根ではあるものの大いに性質を異にし、今や舊世界ヨーロッパのみならず、全世界を教化善導せんとする「強烈な使命感」を伴つてゐる。しかも現代のアメリカは、先のウォーレンの指摘を俟つ迄もなく、有無を言はせぬ壓倒的な軍事力を保持してゐるのである。「世界で唯一の超大國」の斯かる現状を危惧して、西崎文子は自著『アメリカ外交とは何か』の終章をかう結んでゐる。

確かに、冷戰終結後のアメリカは、力、とりわけ軍事力の面で他に追隨を許さない。しかし、それを強調するあまり、アメリカの力を相對化して捉へ、この大國を國際社會の帝王ではなく、その一員として位置づけようとする努力を弱めたり怠つたりしてはならない。帝王が裸の王様ではないといふ保證はないからである。

如何にも、アメリカが「裸の王様ではないといふ保證」は無い。しかし、その「力を相對化」し得る程のものを吾々は持合せてゐるか。これは同書にも紹介されてゐるが(七八)、マサチューセッツ湾殖民地の初代總督を務めたジョン・ウインスロップは一六三〇年、イギリスからアメリカへと渡るアーベラ號の船上で、以下のやうな訓話を行つた。

神と吾々との間には大義が存する。吾々は「神の攝理を具現せんとする」この任務のために神との契約に組入れられてゐるのだ。吾々は委任狀を取得し、主は吾々に自分たち自身の規約を作成する許可を與へ給つた。吾々はこれらの行動に着手する事を宣言したのである「中略」。

「信仰を同じうする者同士が一體である限り」平和の絆の内に靈の統一も保てよう。主は吾々の神となり、神の民たる吾々の間に喜んで宿り給ふであらうし、あらゆる點で吾々に天の恵みを授けて下さらう。かくて吾々は神の叡智、力、善、眞理を、これまで見知つて來たよりも遙かに澤山、目に見る事になるだらう。吾々はイスラエルの神が自分たちの内に坐す事を見出すであらう。その曉には吾々が十人であつても千人の敵ど

49)

この「丘の上の町」とは新約聖書「マタイ傳」第五章、イエス・クリストが弟子たちに説いて聽かせる「山上の垂訓」に由來する表現である。「汝らは世の光なり。山の上にある町 (A city that is set on a hill) は隠ることなし。また人は燈火をともして升の下におかず、燈臺の上におく。かくて燈火は家にある凡ての物を照すなり。かくのごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めん爲なり」(第一四〇—一六節)——と、このやうな淵源にまで遡らずとも、ウインスロップらによる殖民地建設がイエスの教へに基づく深いクリスト教的信仰に裏打されてゐた事は自づと明らかであらう。「ニューヨーク・イングランド」こそ神からの特別な使命を擔はされた「世の光」であり、恰も「燈臺」

の如く、自らの「善き行爲」にて世界の闇を照す模範的役割を演じなければならぬといふ、かうした「ピューリタンたちの理想」こそが、西崎も認めるところ、「アメリカの對外政策」の「原點にあつた」のである（七）。再び問ふ、それを相對化し得る程のものを果して吾々は持合せてゐるか。ウインスロップ傳『ピューリタンのディレンマ』にエドマンド・モーガンが述べてゐるやうに、とにかく「善意の熱狂者」を抑へるのは「惡人を罰する」よりも「遙かに厄介な問題」なのであつて（96）（註）、「裸の王様」の強烈な選民意識を相對化しようにも、それと同等、乃至はそれ以上の確乎たるもののがこちら側に無ければ凡そ話にならぬ。吾々には人間に訓辭を垂れる超越神がない。それゆゑ、土臺「ピューリタンたちの理想」に匹敵し得るやうなものなど、持たうにも持ちやうが無い。「八百萬」も神様が御座しますといふのは、絶対者は坐さぬといふ事ではないか。西崎はまた、「私たちにとって重要」な事は「アメリカと世界が共有できる新しい世界認識や歴史認識への可能性を探ることにあらう」とも言ふが（註）、歐・米の文化的差異の融合にすら散々腐心したヘンリー・ジェイムズの生涯に照してみれば、日・米の文化的隔絶を毫も意識せぬ「共有」の「可能性」の探求とやらが、肝腎要の點に於て如何に現實を無視したお氣樂なものであるかは、忽ちにして知れるのである。

ジェイムズに關しても同じやうな「探求」を云々する論者はゐないではない。例へば既に名前を出したメアリアス・ピューリーなどは、流儀の違ひが齋す「葛藤を解銷して、偏狭で地域的かつ土着的ものといった限定的な範疇から脱卻し、より廣汎で人道的かつ包括的な現實に參入せんとする眞剣な試み」だの（220）、「本質的には如何なる國の流儀や忠義にも縛られぬままある道徳的現實」だの（224）、「大西洋を横斷する規模で心に描かれた、人間を結び附ける磁氣の鎖」だの（232）、そんな言ひ廻しを用ひてジェイムズの「國際テーマ」を論ずる。一見氣樂な學者の脳内で繰擴げられる無國籍的な只の觀念操作に見えるかも知れない。しかしながら、彼はかうも言ふのである、ジェイムズによる「生の探求」は「事の性質上、大方は必ずや失敗する運命にある探求なのだ」（239）。そのとほりである。ピューリーは、いやジェイムズは、米歐間に於てすら異文化共生なぞ夢のまた夢だと事實上、言つてゐるに等しい。況んや、世界規模の多文化共生をや。だが、Political Correctness全盛の昨今、かういふ身も蓋も無い結論を導き出しては多分いけないのであらう。已んぬる哉。

註

- (1) 勿論、*OED* による定義まで参照して ‘study’ を “a preparation for future work,” “a careful preliminary

sketch”すなはち「習作」と解するD・M・フォウゲルの説は承知してゐるが(89-91)，この解釋に一元化でゐるものやねおぬめど。

(2))いじせ「國聯」むごく序句を‘the United Nations’の翻語として便宜的に用ゐたが、本來この機關は第一次世界大戦の戦勝國側である「聯合國」の寄合として生れたものだから、吾國で通用してゐる「國際連合」は大こに誤解を招く表現も加さざるものを得ない。現に公用語の一つある支那語では「联合国 (Liánhéguo)」と正しく呼んでゐる。

www.un.org/zh/ を見よ。(中華民國が安全保障理事會の常任理事國であった時には、簡体字ではなく繁體字で「聯合國」と表記。)

(3))いじに限らず、邦語文獻からの引用時に表記を改めた箇處ある。

(4) *The Ambassadors* タイトルマーク版の第111及1111巻に收められていふ。

(5) 但し、)いじばる「善意の熱狂者」とはウイーベロッピングの事ではない、彼で手を焼いたやうな連中を指す。

参考文献

Allingham, William. *A Diary, 1824-1839*. 1907. Edited by Helen Paterson] Allingham and D[ollie] Radford, Penguin Books, 1985.

Bewley, Marius. "Henry James and 'Life'." *The Eccentric Design: Form in the Classic American Novel*, Chatto and Windus, 1959, pp. 220-44.

Carlyle, Thomas. *The Present Time*. 1850. *Carlyle's Latter-Day Pamphlets*. Edited by Michael K[lenneth] Goldberg and J[ules] P[aul] Seigel, Canadian Federation for the Humanities, 1983, pp. 3-59.

Conway, Moncure D[aniel]. *Thomas Carlyle*. Harper & Brothers, 1881.

Eliot, Thomas] S[tearns]. "In Memory of Henry James," 1918. *The Complete Prose of T. S. Eliot: The Critical Edition*. Vol. 1, edited by Jewel Spears Brooker and Ronald Schuchard, Johns Hopkins UP and Faber & Faber, 2014, pp. 648-52. *Project MUSE*, muse.jhu.edu/chapter/1211151/pdf. Accessed 16 June 2020.

Fogel, Daniel Mark. "The Revision of 1909." *Daisy Miller: A Dark Comedy of Manners*, Twayne Publishers, 1990, pp. 87-94. Twayne's Masterwork Studies 35. *Gale eBooks*, link.gale.com/apps/doc/CX170400020/GVRL2u=waseda&sid=GVRL&xid=a1cce954. Accessed 7 Dec. 2020.

Grant, William E. "'Daisy Miller': A Study of a Study." *Studies in Short Fiction*, vol. 11, no. 1, Winter 1974, pp. 17-25. *ProQuest*, www-proquest-com.ez.wul.waseda.ac.jp/

- scholarly-journals/daisy-miller-study/docview/129792949
6/se-2?accountid=14891. Accessed 5 Dec. 2020.
- James, Henry. *The Complete Letters of Henry James*, 1855-1872. Vol. 2, edited by Pierre A. Walker and Greg W. Zacharias, U of Nebraska P, 2006. *ProQuest Ebook Central*, ebookcentral.proquest.com/lib/waseda-ebooks/detail.action?docID=3039411. Accessed 10 Oct. 2020.
- . *Daisy Miller: A Study*. 1878. *Daisy Miller and The Turn of the Screw*, edited by David Lodge and Anthony Curtis, respectively, Penguin English Library, 2012, pp. 1-68.
- . *Hawthorne*. 1879. With Introduction and Notes by Tony Tanner, Macmillan, 1967.
- . *The New York Edition of the Novels and Tales of Henry James*. Charles Scribner's Sons, 1907-09.
- . *The Notebooks of Henry James*. 1947. Edited by F[rank] O[tto] Matthiessen and Kenneth B[arnard] Murdock, U of Chicago P, 1981. *Google Books*, books.google.co.jp/books?id=ger4tDwoLvYCC&printsec=frontcover&hl=ja#v=onepage&q=&f=false. Accessed 8 Dec. 2020.
- Leavis, F[rank] R[aymond]. *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad*. 1948. Pelican Books, 1977.
- Mathiessen, F[rank] O[tto]. *Henry James: The Major Phase*. Oxford UP, 1944.
- Morgan, Edmund S[tevens]. *The Puritan Dilemma: The Story of John Winthrop*. 2nd ed., Pearson Longman, 2006. Weekend Biographies.
- Ohmann, Carol. "Daisy Miller: A Study of Changing Intentions." 1964. *Daisy Miller and The Turn of the Screw*, by Henry James, Penguin English Library, 2012, pp. 201-13.
- Spender, Stephen. "The School of Experience in the Early Novels of Henry James." *The Destructive Element: A Study of Modern Writers and Beliefs*, Jonathan Cape, 1935, pp. 23-46.
- Wilson, Edmund. "The Ambiguity of Henry James." *The Triple Thinkers: Twelve Essays on Literary Subjects*, Pelican Books, 1962, pp. 102-50.
- Winthrop, John. "A Model of Christian Charity." 1630. *The Norton Anthology of American Literature*, 2nd ed., vol. 1, edited by Francis Murphy et al., W. W. Norton, 1985, pp. 37-50.

△ キ - ド ハ' ロ ク - ド • ク ハ 「南北戦争の遺産」 銀河書譲
書譲 平成11年1月刊

夫譯、岩波文庫、第二刷、平成十五年。

西崎文子『アメリカ外交とは何か――歴史の中の自画像』岩波
新書、平成十六年。

編輯後記

『英文學』第百七號への投稿論文は計三本、厳正なる審査を行つた結果、總てを載せる事と致しました。いづれも英語論文であり、それぞれシェイクスピア、トールキン、英語教育を論じてゐます。その他、文學學術院専任教員執筆のヘンリー・ジェイムズに關する邦語論文一篇を掲載しました。今後とも會員諸氏からの力作を募りますので、奮つて御投稿下さいますやう、お願ひ申上げます。

前號の編輯後記にて豫告したとほり、昨年一月二十日に八十六歳で亡くなられた大井邦雄名譽教授を追悼する文章を、専門を同じうする教へ子お二人に御執筆願ひました。それを讀めば、實際に聽講した事のある方なら誰しも、在りし日の先生の御姿を思ひ浮べる事であります。とにかく演劇が、シェイクスピアが、もう好きで好きで堪らないのだなどいふ事だけは、第一文學部英文學專修に進級したばかりで専門的な事など何も知らない二年生の私にもよく解りました。翌年上梓された處女出版『シェークスピアをめぐる航海』（早稻田大學出版部、昭和五十九年初版、平

私は學生としては「英文學研究 I B」を拜聴したのみですが、後年、教職員向けのパソコン講習會で偶然同じ教室になつた事があり、電子テキストの閲覽方法等を一通り学んだ後、歸りしなにかう言はれたのを今でも憶えてゐます、「やっぱり本や辭書は冊子で讀まないとね。」——數多の藏書に圍まれ續けた大井先生の御逝去を悼みます。

本年度は武漢發の新型コロナウイルス感染症で散々な一年でした。大學の講義や會議も殆どが、また教育・總合科學學術院の英語英文學會との合同大會は總て、Zoomを介したオンライン形式で行はれるといったやうに、萬事、手探り状態で進める他ありませんでした。けれども悪い事ばかりだつたかといふと、必ずしもさうではなく、例へば期間限定で多くの文献を無料開放してくれる出版社もあつたりして、私などはT・S・エリオットの決定版散文全集（全八卷）を落手致しました。未だ冊子體は出てをらず、有料PDFのみ購読可能でしたが、今回、ジョンズ・ホプキンズ大學出版局及びフェイバー＆フェイバー社の厚意により總てダウンロード出來たので、最新の詳註が附き猶且

つ検索も自在なエリオットのテクストを早速、春学期の講義資料や本号掲載の拙論に有難く活用させて戴きました。

このところ先生方の御退職が續き、洵に淋しい限りでしたが、本年度は複數の新規嘱任スタッフを英文科にお迎へする事が出来ました。山内功一郎教授（アメリカ詩、静岡大學人文社會科學部より御着任）、そして皆本智美准教授（十九世紀イギリス小説、攝南大學外國語學部より御着任、來年度より教授）の御二方です。今期から早稻田大學英文學會の役員として、投稿論文の査讀にも當つて戴いてをります。

前號に引續き、本號の編輯には英文學コース助手の斎藤寿葉さん、文學研究科博士後期課程の大學院生・篠原健吉君と加藤佐和子さんの手を煩はせました。ここに記して謝意を表します。また斎藤さんは二年の任期満了により助手職を退任する事になりますが、この御時世、最後の一年間は特に色々と大變だつた事と思ひます。その勞をねぎらひ、今後の精進を祈念します。

（編輯幹事 岡田俊之輔）

英文學會

會長

樋木伸明

監查

小田島恒志

幹事

岡田俊之輔

理事

エドワード・チャン

都甲幸治

堀内正規

平埜雅久

皆本智美

冬木ひろみ

山内功一郎

タニア・ホサイン

スティーヴン・ライアン

渡辺愛子

（二〇二〇年度）